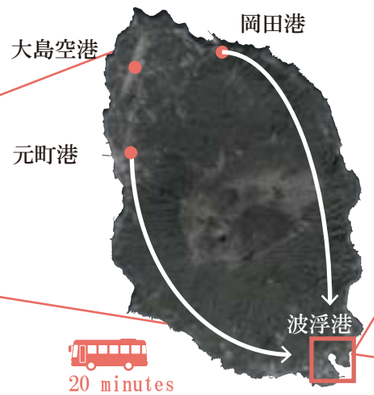
紡ぎまち　しつらえと共同化による生きた保存

港に流れる夏の宵風、夕餉の時間を共に過ごす。人々の時と想いを紡ぐ。
人を引き立てるための建築、景色を見せるための建築。
生活をお互いに楽しめる、空間をお互いに楽しめる、和音に満ちた場所。
共に生きていく人々の触媒として、今を解き、先へ結びなおす。

波浮港とは

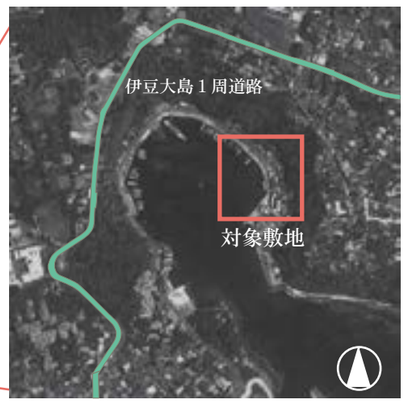
伊豆大島

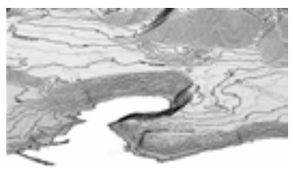
- 東京から約 120 ㎞南にあり伊豆諸島最大の島
- 人口は約 8, 300 人（1952 年は 13, 000 人）
- 世界三大流動性火山の活火山三原山がそびえ、有史以来噴火を繰り返している
- 島の 97%が自然公園法によって開発が規制
- 全島いたるところに「やぶ椿」300 万本
- 海岸線沿いの平坦地に 6 つの主要な集落が点在



波浮港

- 伊豆大島一番南にある 6 集落の 1 つである港町
- 旧遊郭のまちなみが残る
  （ノスタルジックな風景により観光スポットとなっている）
- かつての繁栄を物語るように大正期の建物が残る
- 木造 2 階建やバルコニー装飾のある建物が連なっている
  （3 階建ての建物も多くあったが取り壊され、旧港屋のみ残る）
- 玄関口から一番遠いこともあり、人口は 6 集落の中で最も大きく減少





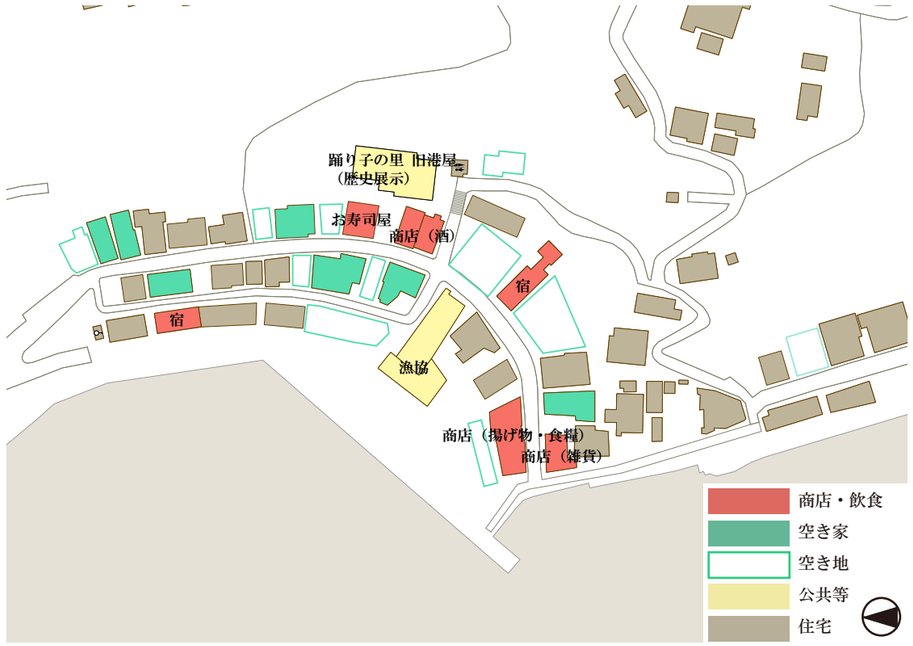
火山湖が海と繋がり港となった

波浮港の歴史

漁船の乗組員や観光客が全国から集まった。
小さな港町に、お茶屋、カフェ、映画館、芝居小屋が軒を連ね、日本を代表する文人墨客も数多く訪れ、波浮の港に泊まり、たくさんの作品を残した。

最盛期の波浮港　風待ちの港として栄えた

建築物使用状況



ノスタルジックな雰囲気が残っており、それを目当てとして訪れる観光客も多い。
それゆえに、建物や人が更新されず、昔ながらの店舗併用住宅で高齢化した店主などがそのまま住み、使ってはいるけれど見た目は閉まったままという建物が増えている。

開いているのか分からない店舗併用住宅

大正時代から残る建物の空き家

建物が取り壊され、空き地となっている

目的・問題・提案

目的　まちなみの継承・再生

波浮港は大正時代からの建物が残り、ノスタルジックな物語を持つ。
美しい港の風景やゆったりとした時間を過ごすことが出来る場所。
住人も大切な場所を残すことに対する意識が強いが、維持が難しくなってきた。
そんな波浮港の風景を未来に残していくために何が出来るのかを考えた。

問題　地域の維持が困難（空家・空き地　住人の高齢化）

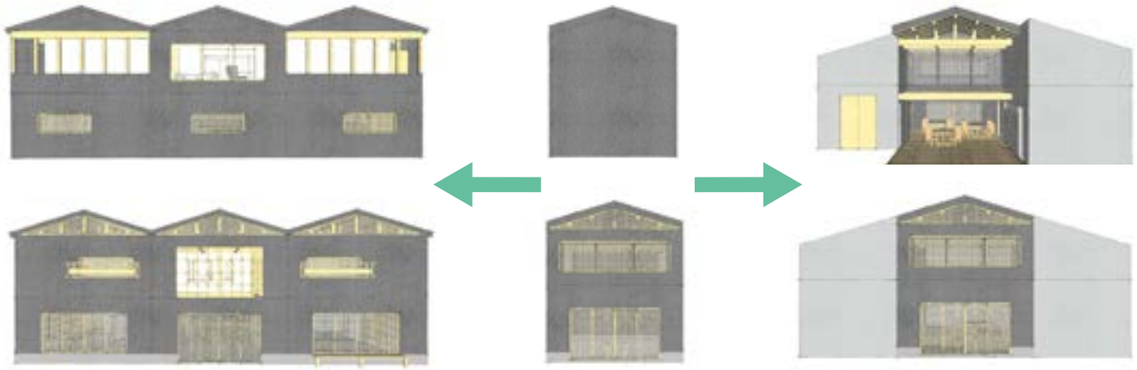
1. 大正時代からの建物の老朽化が進むも使用者がいない為に維持できていない。
2. 若い住人が少なく、地域共助の母体となる地域コミュニティが高齢化
3. 移り住みたいと考えている人もいるが、空き家を借りられない状況がある。
（基本的に人との交流を通じて生活を成り立たせる為、知る相手にしか貸さない）

解決手段　3 つの提案を組み合わせたまちづくりのスタート地点

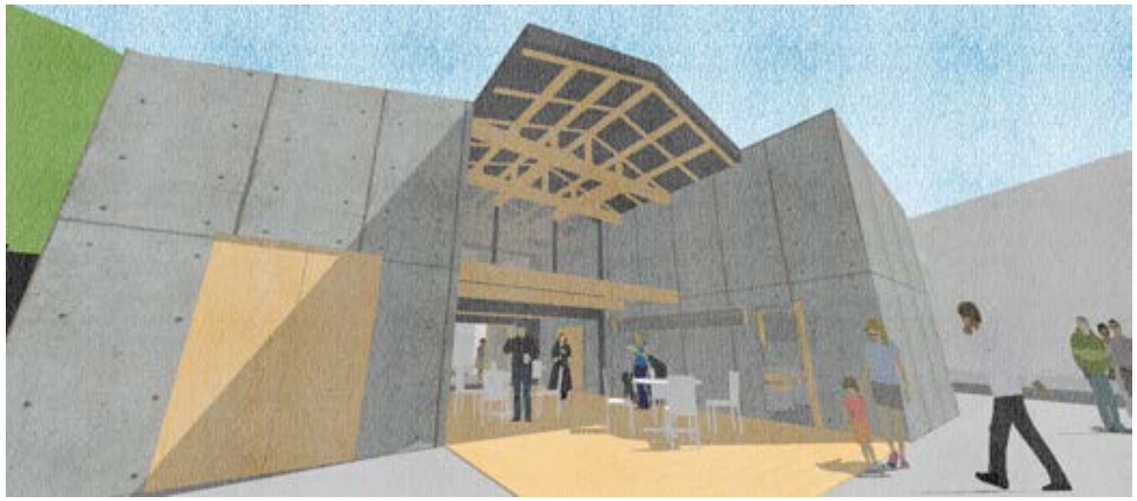
1. 大正時代から残る既存建物のリノベーションと路地・景観の再生
2. 住人・移住者・体験者・来訪者のコミュニティベース（まちづくりの拠点）
3. 住人・移住者・生活体験者の為のコレクティブハウス

1．大正時代から残る既存建物のリノベーションと路地・景観の再生

既存建物を現代に合わせ再編集



建物の共同化、協調化をすることより敷地や建物の形状を整理して居住条件等を改善。
新しい使い方が可能となる。過去の生活を懐かしむだけの再生ではなく、使われることを意識し
新たな機能が組み込まれていくことで町の活力を担う様々な世代が共生できる。



遠景・中景への意識

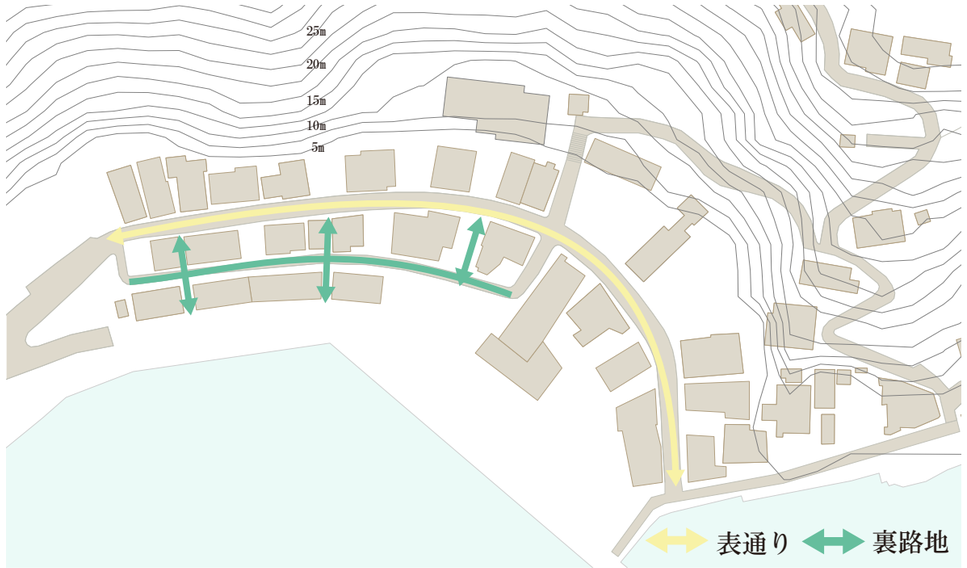
遠景：伊豆大島一周道路沿いに波浮港展望台があり、まちの景観が一気に見渡せる。
　　建物の共同化による協調化、まちなみを整えるとそのまちの個性が遠くからも伝わってくる。

中景：少し歩けば行ける距離。人々の動きが見えたり、音が聞こえたり。
　　オープンスペースにより人々の活動が見えれば、行ってみたくなるような期待感が高まる。

滞在型の観光名所に

かつて波浮港では多くの宿が立ち並び、にぎわいがあった。しかし、現在では滞在する理由がない。
路地や通りを魅力的な空間にすることで、まちとの一体感を味わえるなど滞在する楽しみを与える。

表通りと裏路地の再生



一歩中に踏み入れば､包み込まれるような安心感や生活感を感じさせる。
しかし現状の裏路地は物置のようになっており、上手く活用されていない。

通り土間を用い、住人による路地裏へのアクセスを増やす。
積極的に利用することで裏路地への意識が変わっていく。

自由に立ち止まり、たたずみ、談笑できるの場　または子供たちの遊び場。
表通りとは違った、普段の生活を見たり見られたりする場を取り戻す。

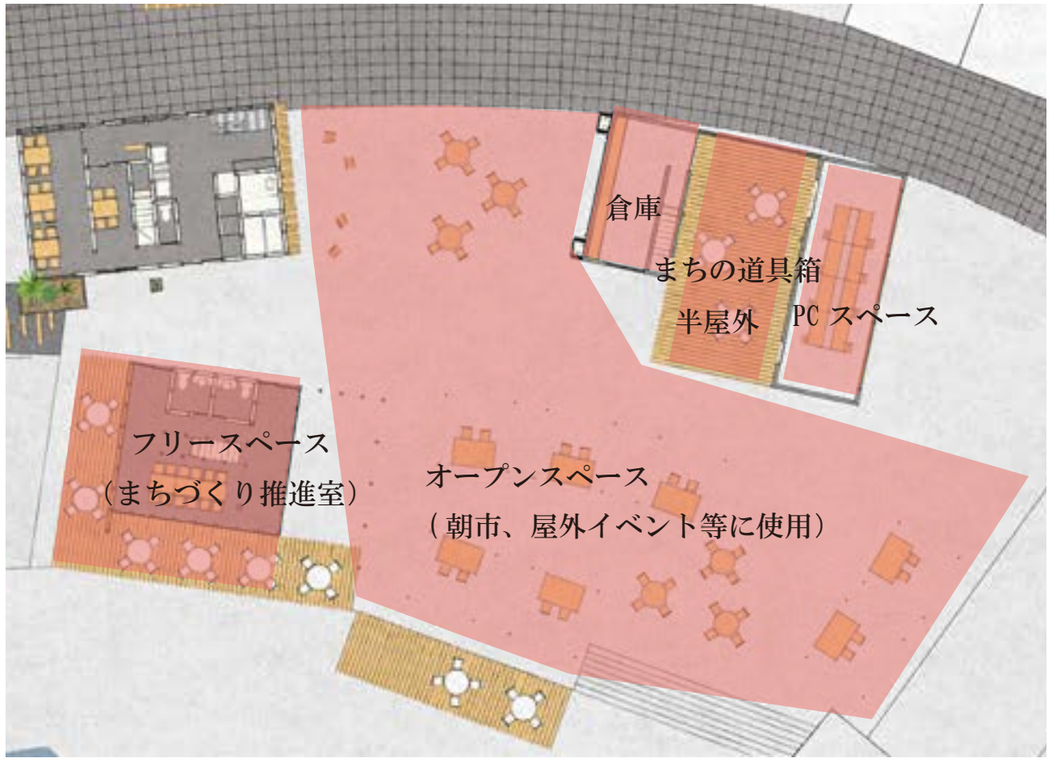
石畳が敷かれ、木造が立ち並ぶ風景は他の集落にないノスタルジーがある。
しかし車が通る道でもあるため、生活が通りに感じられず寂しさもある。

通りの外に駐車場を設け、家具を通りにしつらえることで
それが簡易的なインデックスとなり表通りが人間の道に戻る。

家具をしつらえることや、人々が自由に歩くことが出来ることで、
表通りには現状にはなかったアクティビティがうまれる。

2．住人・移住者・体験者・来訪者のコミュニティベース

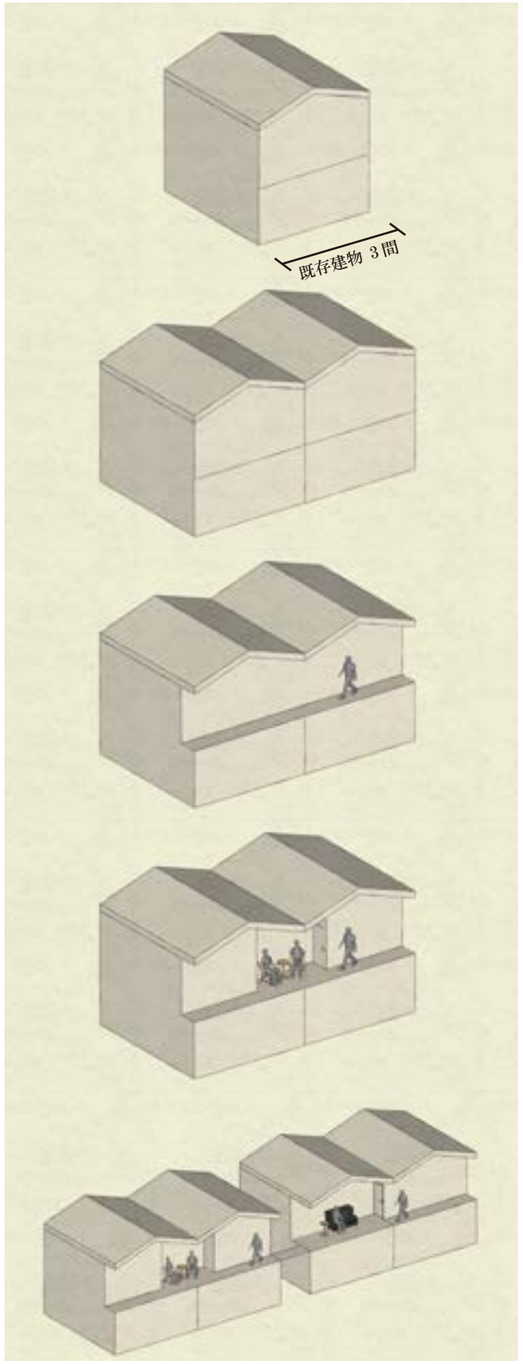
コミュニティベース　目的は決まっていない、もっと自由な場所

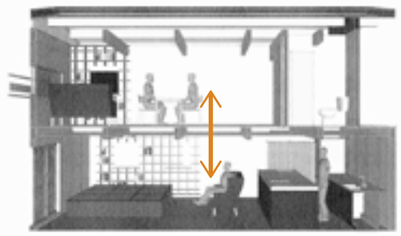


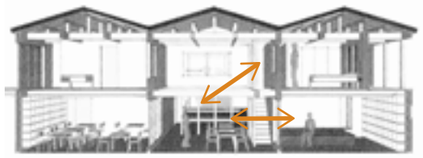
現状ではコンテンツの充実によって施設に人を呼び込む手法では成功しない。
まずは人が集まる場所をつくり、人的な交流を促し、賑わいのある場を目指した。
当たり前すぎて住人には気が付かない魅力、それに気が付ける外部の人も参加できる。
さまざまな人が参加可能であったり、何気ない小さな会話の場がまちづくりを加速させる。

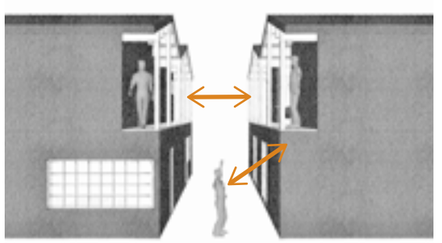
3. 住人・移住者・生活体験者の為のコレクティブハウス

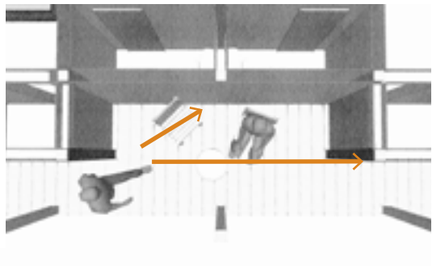
ダイアグラム

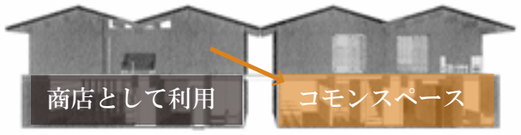








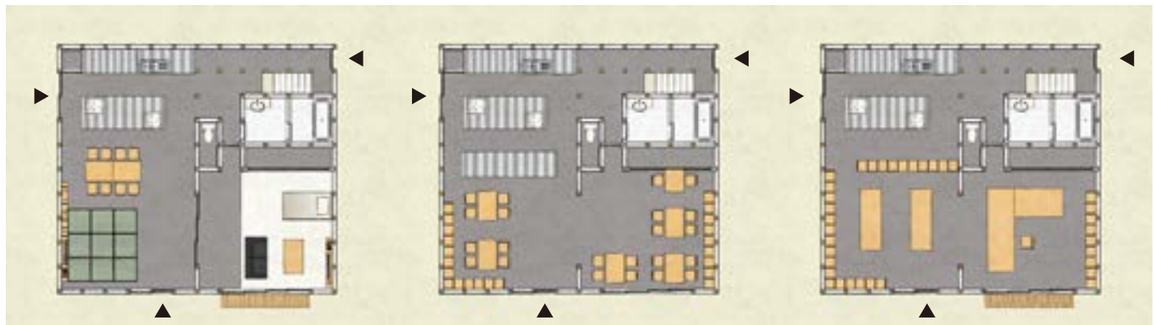




1．　１Ｆをより自由に使い替えることが出来るようになる
2．　分棟により、建物は個別更新の容易性、拡張性が高まり、まちの持続性しやすくなる。
3．　移住者と住人、移住者同士の緩やかなつながりがうまれる。

フレキシブルな1Fゾーン　しつらえて様々な使い方を可能にする

使い方は自由で、上記のほかにも様々な使い方が期待できる。
専用性を下げることで、住人が変わってもしつらえ方によって使い続けることが可能となる。

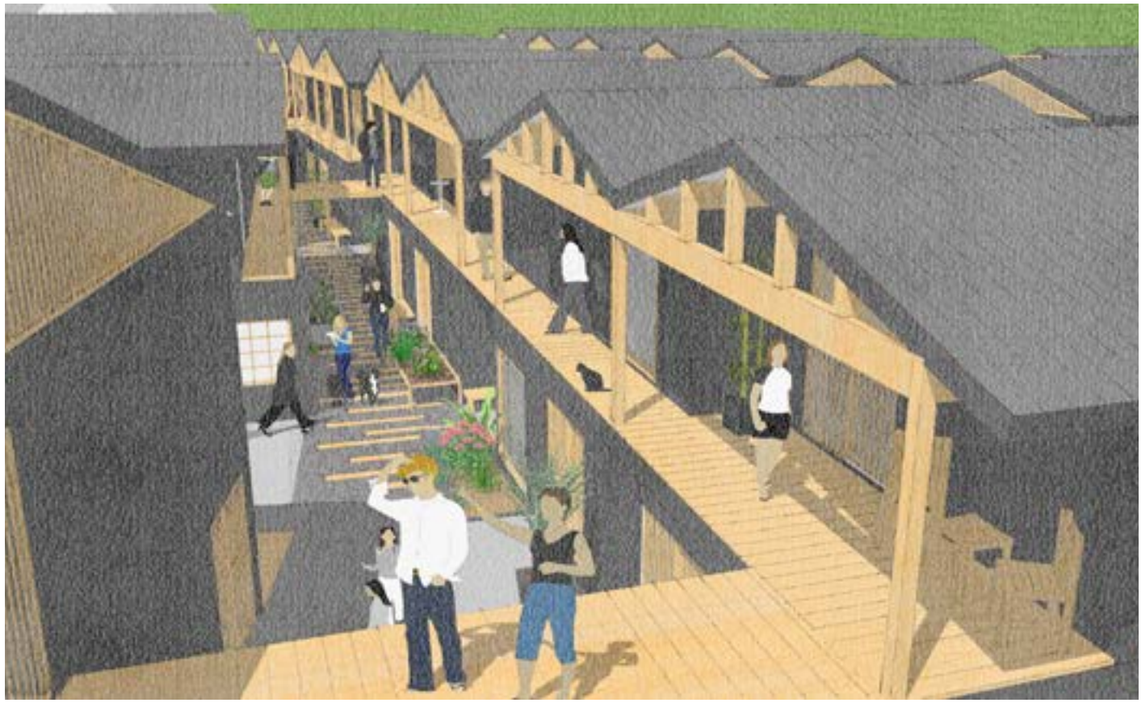


コモンスペース　住戸（高齢者など）　飲食店として利用　ギャラリー　工房

SOHO としても利用できる

自由な交流、様々な住まいを可能にする 2F

各コレクティブハウスを接続する住民用の回廊によって、軒下のアルコーブで立ち話をしたりと
コミュニケーションの触媒、外部空間と居住空間のインターフェイスとなる。



コモンスペース
住居
飲食店
コモンスペース
住居
工房
ギャラリー
コモンスペース
住居
観光案内
ギャラリー
バス待合室
住居
コモンスペース
商店
住居
飲食店
まちの道具箱
+2500
+0
宿 ホール
飲食店
オフィス
まちのフリースペース
まちづくり推進室
+2500
+0
1
4
10
m
1
5
15

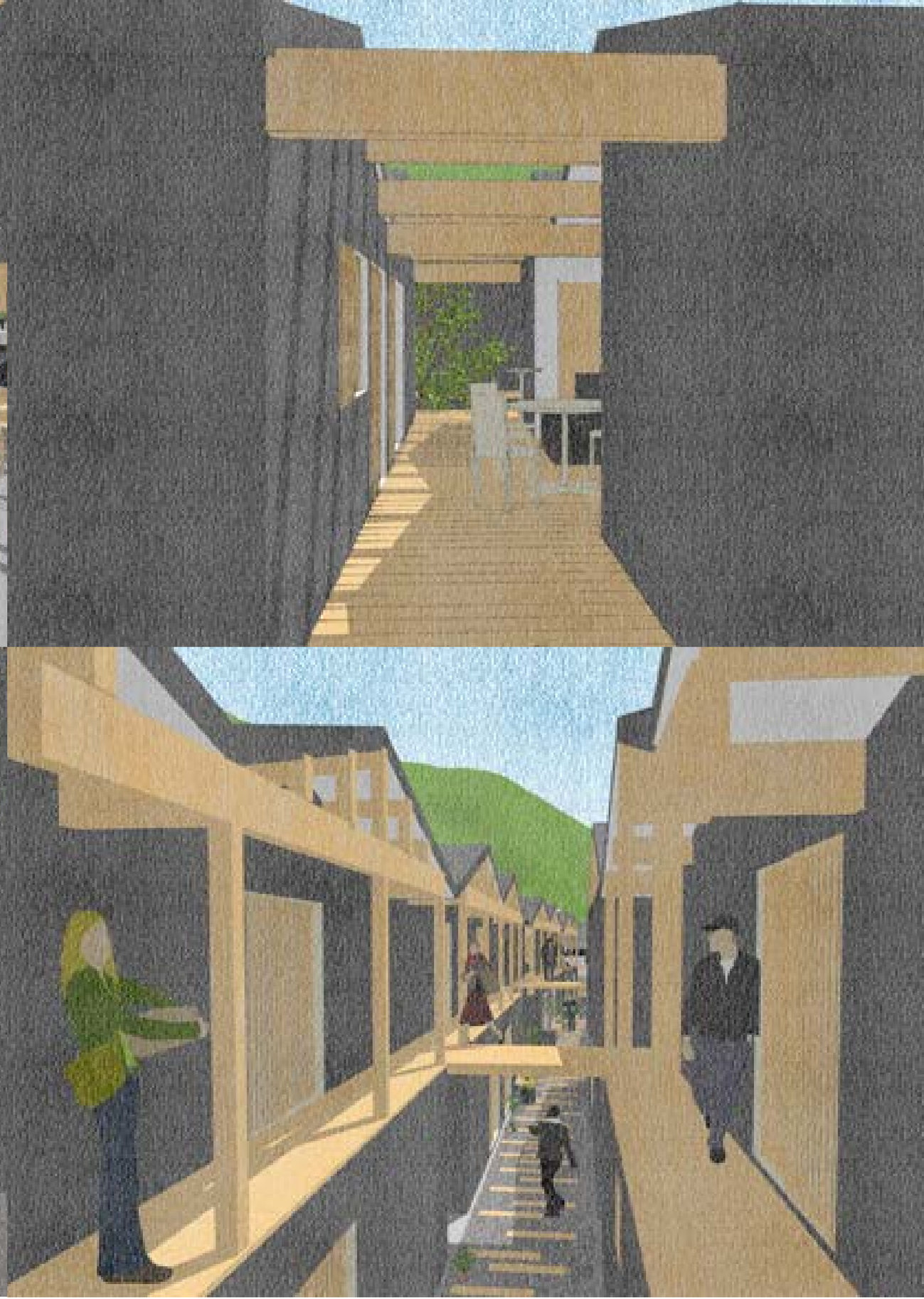
1F 平面図

住居
住居
住居
住居
住居
住居
住居
住居
住居
住居
住居
住居
飲食
住居
宿 部屋
宿 部屋
宿 部屋
宿 部屋
宿 部屋
宿泊者用レストラン
ゲストハウス
コモンスペース
+5100
+5100
1
4
10
m
1
5
15

2F 平面図

A-A´ 断面図

B-B´ 断面図

C-C´ 断面図

配置図